



繪本豐臣勲功記

初編  
八

遠近  
2209  
8



13 遠  
 2209 號  
 8 卷

繪本豊臣勲功記初編卷之八

目録

左馬助丸新十郎復讐さまたけまるしんじゅうらふしやうふくしやう

附其子被誅つゝそのこがせらる

本下與平子論陣法得賞ほんげらとへいこ論じんぽうとくしょう

附其所築つゝそのこゝにたてる

豊臣紀初編卷之八

目録

豊臣記初編卷之八

木下使六角家借得武器

附 謀作加勢

今川義元軍馬發東海道

附 欲攻尾州



繪本豊臣勲功記初編卷之八

江戸 八功舎 徳水剛補



左馬助歿新十郎復讐及属其子被誅

子胥越小憑て呉と頌し。子房漢と相て秦と滅を戸部新十郎が  
孤獨の身されし。忠孝の心一し。復讐の懐專さればやんり望の  
連せしんや。然れども山口左馬助某子九郎次郎。今川義元の招ふ  
應し従者と僅ふ二三十人率て東海道と馳下り。程々駿府  
みつきなれば待設する今川義元明日直ふ對面せんと。山口父子ふ  
言囑する。朝比奈備中守承听て戸部新十郎ふ謂喟也。對面の  
廳の這間ある。脚戸の陰ふ躲置。尙謀もいらんと力士四五人  
これふ副より。偕九郎次郎と大洞廳まで。これと生捉多撥とす。

豊臣記初編卷之八

〇一

カ士十人と玄關の左右の陸小伏重なり。當日ふまねが山口父子。斯く  
 事とも知らざり。尋常の装束なり。本城小投来り。玄關に當  
 走り。奏者の侍出迎へ。今日主君の命あり。まづ左馬助小對面せ  
 られ。然し後九郎次郎小見合せんとの許許あり。君の御意へ  
 案内せん。左馬助と伴ふ。静く周廳とくち通る。猶奥深く  
 進みゆく。九郎次郎ハ斯と知らねど。何とやら胸うち謀ぎ。心得  
 かく思ひいへ。父小恥と目注あり。左馬助も怪しやと。思へば一足  
 踏止り。這より返まきまもあらねば。氣配りく同毎くと。瞬も  
 せで歩行。對面の廳の隔亮と。用や居や。左の陰より戸部新十郎  
 跳出聲ともうけぞ。無事とくむ。左馬助も心得て。振脱んとせむも。  
 大力の戸部小抱止られ。刀と擧げ腕もかむ。怪しきやと。大音あげ。

孰者なれば左馬助小。斯く無礼とありき。詞辯と語れと喚ぶ  
 小。新十郎ハ嘲笑ひ。汝が罪のちもむき。聽て君より沙汰あらん。小  
 其响詳小承听也。汝と捕ふる乃郎ハ。戸部新十郎門。嫡子  
 新十郎あり。左馬助這小来らば。活捉りとの許許と奉汝と斯  
 へ捉得り。尋常小繩と承り。一喝發して梓胡まを。左馬助も  
 きこゆる勇士。新十郎と異ともせむ。要時かゝらぬ扱合り。新  
 十郎ハ父の仇あり。増て主君の命あり。做損ともせむ存生あるも。面  
 目あらと念誥。齊力かゝり根かゝり。命惜むと揮く所見。鐵  
 虎銅龍闘あて。裂谷崩嶺まをがむ。斯る處ハ朝比奈備中  
 守頭出。大音声小罵て謂り。呼よ左馬助。逢ひれり。奉止まぬ。  
 是主君の設意あり。かゝりて争えより。勇士らハ細められよと



豊臣記 編纂



主命奉て  
戸部新十郎  
列勇必志山  
口左馬助と  
活捉

豊臣記 編纂

声うけられて左馬助。猶豫あり。其虚ふ附入新十郎カと忍び。左右より下ふ扱伏て。遂ふ索とを羅うける。左馬助へ眼と瞋る。我身ふとて新も。過ぐるを更なる。猶又疑しき條わらへ。一應津訊わらへ。如何にも計ひを之とふ。斯る不礼の何事ぞ。我首且も尾東鳴海の城主とて。魁將と蒙る左馬助と。匹夫下郎の執扱へ。斯許大領の今川家よ。骨法知らる。武士のまきや。這得とある上へ。怖えき事へあうべし。主君の前へ快撃させ。け身の究と言解ん。早し撃れ。朝比奈と。鶴とまこと。采合を。諸腕うけ。一隔ある。槽櫃狭の因へ推込る。偕又玄関小控へ。一子九郎次郎へ。父が身の上と案ト煩ひ。奥殿の方ふ眼と配り。脱誥て在らう。忽万韻喋。叫起る。声音へ正しく。父左馬助あり。

ければ。初ハ事こそ。立驕る。後殿と目當て跳入ると。と声うけ左右より。十有余人の力士輩。設意とて呼らう。九郎次郎小跳蒐る。此士も父小劣らぬ武勇心得とて。正冠とくけ。一人の力士が。腕搔挿で抛擲し。續く力士と二人まで。阡庭と陌庭ふらへ。僵し。困場小跳出。斯と見るより。それ遁まら。蒐れかれと呼らう。多くの力士頭出。四方の突門と守固。九郎次郎と中小執圍。これ今へ遁る途も。厭く。無双の力士輩。十有余人。余人を。跳蒐て担着と。然ハ真術と見え。太刀抜弱。て進倚る。力士二個と四个おせり。某も懲む。面背左右。声と合せて。担止んと。虚と見徹て。細腰。臑節。摺と着と。砍て。拂ひ。踏眩。抛拵。怒喝と。突へ。揮く。疵と蒙る。兵輩。驚く。

豊臣記 初編 卷之八



捉得つべきその涯。見くぬと二浦左馬助。庵原右近走り出。九郎次郎鄙怯あり。いづも猛威と奮つて。道なきのまらむ。汝が父いふも既小。構とさく。郷無かり。然るは汝斯をうり。狼籍と奉止て。父左馬助ケ言譯の妨ともありぬ。とや尋常不衆小伏せし。設意と重しと思ふ。呼る声小九郎次郎。方僅ハ何とう言ひらうん。疑令解べき道理ありとて安穩ある身小いらん。然らば咱まの自殺して。父が冥途の魁せんと。最期と決して怒声と発し。いふ方へ聴せ。俺們父子ハ尾州より當家のらう。箭と慕ひすゆせ。旗下小属してより。敢心なく忠義と竭し。主君の命せよ又若び。織田家小歸伏の体とさ。我身ハ清洲小質とありて。憂年月と千辛万苦。當家上洛の道と前んと。

日夜ふ心と碎き。いと。讒者の實否も同究め。俺們父子と罪あるまら。當家滅亡の緒端あり。是を正しく尾州の謀士が謀果せて。け珍事と引せし。と覺る。其謀計小陥り。君の心の浅く。吾儕も運も當家の栄も。共ふさうあり。成果さ。見し。勇士の一言ハ證あり。と採小持。さる太刀と把懸し。肚小擲。立正一文字小搔斬て。突起する采灰さけ。朝比奈の浦と敵とて。大張健。氣小果さう。廢ぬぬをさうりけれ。此事を義えへ。言状せし。听し。ゆされて。下辞あり。九郎次郎自害せし。上ハ左馬助が罪詮。義小暨さ。快く誅と加之。と命と朝比奈承听。左馬助と囚車さ。阿部河原小輓出。戸部新十郎とゆ。山口が首と歐せし。山口滅びて。鳴海城小。主さう。稱小



頼朝とて。岡部五郎兵衛長教美濃守常慶の男と遣へし。此こそ  
 織田中か後丹後守の諸老。木下實今門と所合戦これら。主君  
 信長も勸めし。山口父子遠く。義元これと滅さん。小  
 然らば今門と戦ふ。軍令の如く誓ひし。諸老もこれと  
 猜思。如何やあらんと待程。此度義元是見よ。山口父子  
 か首級とめて。笠寺田の大道へ獄門ふけられ。これと見聞  
 する。諸士愕然とく。ち駭馬き。實木下凡人なら。舌と  
 振て感佩。已来如く。輩も。半木下伏し。然れども  
 柴田佐久間の両士へ。左右偏執の念解。藤吉郎と悪むと  
 敵より。猶十倍せり。浩く。程小信長へ。山口が滅亡と。祈り召れ  
 這上へ心と決。義元と合戦まき。城中へ沙汰せらる。柴田

権六これを听。佐久間小叫て。謂ける。我君木下が辨舌。小迷ひ  
 今門家と戦む。事。當家滅亡の端あり。如何も。渠  
 と退け。安穩とせん。事と思。主水が如き。族あり。終る。木下が  
 心腹。小歸も。然る。小我今一計と。コ支せ。渠奴素より。武術智謀  
 小達。まこと。い。文字と。見ると。最。忠。兵書。い。も。讀  
 ず。因て。兵理の。奥義と。傳へ。平手監物と。同。舌。させ。耻と。與へ  
 て。退け。を。や。と。両士。密。ふ。これと。談。下。所。前。へ。出。て。言。状。を。も。ゆ。入。  
 文武ハ車の。両輪。これ。と。缺。ても。轉。ら。ぬ。道理。然。れ。バ。木。下  
 藤吉郎が。學。力。の。や。と。分。明。小。試。す。い。が。平。手。監。物。と。議。論。を。  
 尚。木。下。が。缺。る。輝。の。け。も。せ。ば。傳。授。さ。せ。ん。と。存。ま。る。あり。玲。れ  
 主君の。所。を。ふ。か。い。て。命。せ。つ。け。ら。れ。し。を。や。と。言。き。小。信。長。心。屬。れ。

是又例の如き。悪き奴輩のそとと。思されしども。これ評され。織田殿やうて平手と。昭。這詞と命せ。听られて。後次。木下と。昭せ。兵書問答と命せらる。藤吉郎も有る。旨。清奉り。と。退出せ。既。不。當日。不。あり。ね。れ。織田殿。大。岡。廳。不。出。と。柴田。佐。久。間。丹。羽。池。田。備。譜。代。の。老。臣。諸。士。の。面。我。も。我。も。と。列。座。せ。暫。ら。木。下。平。手。各。出。仕。座。と。東。西。不。三。對。然。木。下。平。手。不。云。蒙。昧。無。智。の。小。臣。へ。貴。家。相。傳。の。軍。法。ゆ。て。清。傳。授。あ。る。か。下。け。る。決。承。受。ん。と。言。ま。と。監。物。否。清。傳。授。ま。と。き。書。も。な。れ。と。君。の。清。為。不。く。足。さ。る。所。と。扶。助。合。の。ま。う。足。下。も。武。道。兵。法。丹。練。せ。ら。れ。と。承。听。る。試。不。と。れ。と。言。さ。れ。と。り。木。下。頭。と。さ。げ。い。う。で。う。と。每。学。の。身。と。り。て。

論。ざる。この。あ。と。け。ん。や。只。清。傳。受。と。存。せ。い。也。歡。躍。り。て。出。仕。せ。り。と。身。と。謙。退。る。と。監。物。見。て。然。ハ。一。言。発。言。せ。ん。开。も。兵。と。用。あ。不。合。區。の。軌。則。あ。る。或。ハ。陣。形。隊。部。法。不。合。不。便。即。利。あり。合。い。ざ。れ。バ。其。利。と。失。ふ。ゆ。え。不。兵。書。と。熟。得。せ。ざ。れ。バ。陣。列。隊。伍。と。進。退。さ。る。と。軍。師。が。隨。不。自。由。あ。ら。む。徒。不。戰。場。の。魁。と。馳。て。敵。士。と。歐。ハ。匹。夫。の。勇。の。と。然。る。不。足。下。兵。書。と。學。を。不。陣。法。と。知。さ。る。胸。の。自。心。の。発。明。と。憑。ら。ず。軍。と。指。揮。し。む。え。律。誠。不。危。不。と。謂。ふ。也。慎。む。と。至。極。あり。と。り。木。下。課。の。玉。一。武。士。悉。く。兵。書。と。讀。も。小。臣。と。ら。ま。ら。材。あ。く。學。み。兵。書。と。讀。こ。能。わ。ざ。れ。バ。只。先。陣。と。駈。せ。あ。せ。歩。卒。の。能。と。不。存。不。存。と。い。ふ。も。殘。兵。あり。て。力。量。も。又。あ。ら。ざ。れ。ハ。其。功。も。不。成。と。い。ふ。これ。が。不。法。と。清。傳。授。あ。ら。不。軍。不。臨。と。危。ハ。

くらざる律もやと。存ぞん存ぞん多たと手て伏ふま。柴田佐久間へ心こころられく。進すす出て  
 声こゑと暴あは小こ。何なんさぬ兵書へいしよと讀よもく。兵道へいどう軍議ぐんぎと論ろんもる。律りつハ闇夜あんや  
 の礫つら小こ齊せい。うらん。某方そのたう是これを利り口くちふせ。老臣らうじん諸士しよしの評議ひやうぎの腰こしと。  
 妨さまたあまそそ奇怪きかいなれ。己後このち兵書へいしよとよく学まびて。君きみ小忠義ちゆうぎと竭つさる。  
 と叱ち着ちやくまば藤吉郎とうきちらう。各賢おのづかの行教訓ぎやうきやくん。忍入おそれりてひあり。老らうううハながら往古いふくの  
 軍法ぐんぽうとめて。今いまの世よの戦場せんじやう軍所ぐんじよ小用ちゆうゆるとも。勝利しょうりと得えるとハ決極けつごく  
 志しがう。开ひもゆり人の兵書へいしよ小用ちゆうゆる。唯ただ規矩ききよとのと論ろんせなれ。古人こじん  
 の糟粕そうぱくと謗ぼうも族うぢもひあり。孫そん吳ごをとり小兵法へいぽう者しやハ百代ひやくたい不易ふえきの軍師ぐんし  
 あり。孫そん子しハ九变きゅうへんの理り小通つうむる者ものの兵へいと用ちゆうゆるの道みちと知しるとのひ。  
 吳ご子し胥しよへ変へん小應おうむると。軍ぐんの法ぽうと稱なづく。陣列じんれつ隊伍たいぎの軌則きそく小  
 おひて。兵書へいしよの終しゆう小用ちゆうひがう。唯ただ是これ臨機りんき應變おうへん。陣法じんぽうもまと連れん

かけぬ。兵書へいしよ小暗こくらとわせむとて。強ちやう不自由ふじゆうなる律りつらねど。傳授でんじゆあ  
 んと学ま置ちて。益えきあきすもいいされば。習しゆ小行ぎやうんと存ぞんむる。あり。と言いふ  
 信長しんぢやう感歎かんたん。み理りありと思おもされけれども。柴田佐久間しばたさくまハ心こころ怒いらり。  
 平手ひらで小恥ちと目注めぢゆせむ。監物けんぶつもあひ心得こころえ。臂うでと張ちやう領りやうふらせ。足あし个こ  
 只ただ其その変へん小應おう。核かく小臨りんとのと説せつとらる。我われ慢まんとや謂いん。故逸こいつ  
 とや謂いん。言語げんご絶論ぜつろんの詞ことばあり。と怒いら声こゑと詰つ着ちやくると。柴田佐久しばたさくま  
 間詞ままことばと革くわ信長しんぢやう小請しんべいて謂いかり。藤吉郎とうきちらうハ臨機りんき應變おうへんと主まとて。  
 古来こらいの兵書へいしよと糟粕そうぱくなり。と誹謗ひがう。用もちひむ。又また監物けんぶつハ兵書へいしよふらう  
 て。陣法じんぽうと云いふと謂いむ。二人ふたりの論議ろんぎ分明めいめいならむ。假かりふ木下平手きののへいぢやうと  
 将しやうり。軍陣ぐんぢんの形かたちと化くわらせ。兵士へいし小指さし揮ひむる所ところと見て渠ち倭やが勝かち  
 負まけと定さだめんむ。是これ亦また明あくふらりと。類たぐひ小これと勸すすむゆ休やすむを

得を織田殿もその準備とせられける。

木下與平手陣法得賞附諸野築此布

天へ九界の主なり。人へ万物の司されば。如何せり人より。天小登はんや。天佐の豊公。これ小敵もする小人カとゆりて。勝へらざる理と知らむ。柴田佐久間愚子も。平手小荷擔ゆら。亦懲むする勝負の事と勸めり。信長これ小獲くを得む。外回環るる洞場小あつて。木下平手の兩人小冬五百の駿卒と與へ渠倚と左右小別りて。假小軍の演習と做しむ。雙方とも小輕錘みり。二尺八寸の木太刀と持しめ。炮へ銃多く矢へ鏃多く。嚴りてぞ立對へり。時小監物藤言郎と標き。足下陣法と知らる。試小一画と布て見よ。否足下こそ軍師なり。一隊と作らむと。謂とも待て平手監物軍扇場

て高声小漢晋の法ハ暫く閑き。吾朝小用ひし。陣列の法と杜見ふ。との小采左右と擡げ。五百の兵卒いんがらふ。一匝とまると見へくる。忽地隊伍と連列。整いとて勸めり。誠小進退周旋調ひ。究も堅固のさす小見えり。然くと平手陣面小馬と騎放し。木下リ松の這陣の名と。知らるや。と呼ばる。頭小振知らむと。唇小監物嘲笑て曰。是ぞ楠正成が用ひし。菊水の陣態なり。兵書と學ぶの教也。先け法と知らる。稱も。まう。正成の用ひする小稱変化せし。あなれども。時機小固ての差畧なり。這法がも知らむと。駿卒の進退せらるべきや。破の法ハいふ。破らるるを破て見よ。破る事の難くらんや。隨分堅固小防がれ。と謂つ後と斯見て大次。浅野と標き。兩士各百騎と牽ひ。翼と張て進む。我二百騎と從

秀吉正流の陣法と將平手監物を亂惱せしむ



て正上面より戦えん。戦ひ央るん响。而士危右より鎗と扱れよと  
 令と傳て持する。采幣進りと烈く振ると。正面隊の一百餘人  
 鳥銃うち蒐進寄。烟の下より亞隊の百騎。矢節間作て散く。子  
 射出矢夫小射疎まされ。まき一猶隊の怒小見ゆると。この隊の二百  
 餘騎。鎧夫をへて擲蒐る。暮ひ一二の兩隊一駿小。矢烟共小放ら  
 つ。之隊の軍兵入替く。面も振らを揉看す。時多へよりと左より。  
 大澤主水。右より浅野弥兵衛。息とも吹かて攻起る小。  
 平手が四隊の駿卒とも。砍起られて門く破れ。右走左奔小散乱  
 毛。木下急小駿卒と退收。上岡音作て勤へる。織田殿仔細小所  
 覽わらて。藤吉郎が軍の進退。神変不思議の指揮ありと。扇と  
 用て廢む。監物へ大に面目と失ひ。朽憾く思へ。詮あければ。

暮ひ陣前小頭木下刀祿の進退周旋。實小大張ある。奉止あり。  
 這上へ足下中も。一陣布て見せし。不肖なれども攻りかえん。この得  
 すと藤吉郎。五百の兵と二隊小ひき別。魁隊の兵士二百人。二陣  
 の兵の二百人と二隊ふりけて。正中と道とを。まきと後陣の駿卒へ  
 符鉄つける。柄楯と持せ。下知一了て藤吉郎。陣頭小馬と騎走。  
 平手とさて呼る。開も這陣と知れし。や。と同と監物見て評と。  
 前後と三隊小分する。更小奇正の差別も見えん。門戸もあき  
 定めて是。無名自由の陣と。りのと木下然小あき。是も。水  
 の陣形あり。時代小用て変化もあき。平手刀祿小破らる。や。  
 斯計途き隊伍と。破る小難きと。先駈散く見せし。と。  
 五百の駿卒と一隊小紫め。監物正魁小進ず。藤吉郎これと見え。

汗珍らや平手刀祢自身小魁と駈あつ。然あらん我も正魁小進  
と足↑と迎へて戦ふ。兩將的面の軍をね、一足も退らんと  
謂ふ監物心小憤怒。返吞もも面悪し。言も謂ふで突  
蒐る。木下霎時遮らう。左右へ取らう。開き正中とけけ通  
らう。平手は是れ氣と裂す。厥へ勝らうぞ軍兵輩。這まると  
さぞ柵起よ。進めくと叫ぶ。敵陣ふう進め。木下敵と  
かひ小伏ふひきよせけるが。時分へくと暗号の采幣。振れと  
あれ。後陣小備へ二百人符鉄。さぞ楯突並べ。殺窓より打  
放も弓鳥銃。暴風疾雨の如く。平手が勢の五百人。駈破  
らんと前小進め。楯と一面小突並べ。楯遠垣の如く。打  
とも柵も更小破れも責あらん。前隊後隊。交易らんと轟

めく野へ左右小用へ二百人。後と襲へて責着す。監物敵と前後  
小受進退らふ究て。塵ふあらんぞ所有あり。木下鎮へ馳卒と  
ひき揚。原の場小勅らう。柴田と敵老臣諸士。食一同小個果  
口と吠てぞ甘心せり。信長大小悦びむ。藤吉郎が方僅の軍配。  
實小凡人あらさうけり。賞せむんばあさむとて。千貫の地を  
加増へむ。冢宰同列の職さうむ。茲小平手監物へ。只一崩と  
侮り。藤吉郎の隊列。進退の自由奇正の伍構。天然と法小  
稱ひ。律の感むる小猶餘りらね。おのれと嫉妬の念もらけ。  
木下が部下とあり。信義と喝して仕えぬと。信長小願ひをね。  
君も神妙ふかりあり。所賞美りてこれと許され。然して藤吉  
郎と近く。昭。這遣平手と對論せ。陣法兵則。この隙小斯

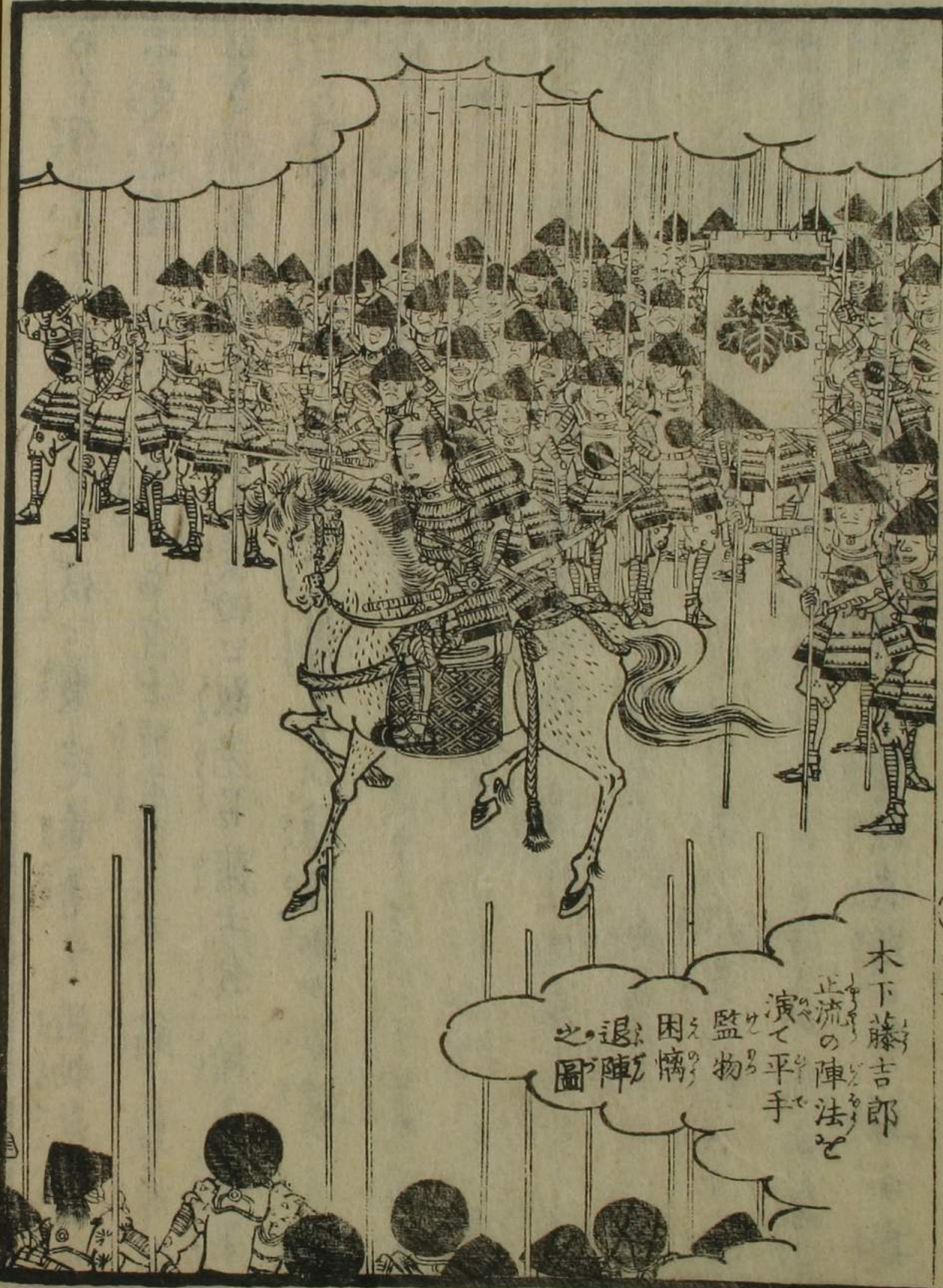
豊後言部抄

豊臣氏夜旗本之八



十三

豊臣氏夜旗本之八



木下藤吉郎  
正流の陣法と  
演て平手  
監物  
困憐  
退陣  
之圖

十三



精しく。演習せしむ。藤吉所評膜て言状を尋る。小石  
初き頃より。偏ふ兵法と掛念。十四歳より遠州ある。松下が家  
奉公して。毎夜軍講兵語と聞。心中これと熟練せしむ。別  
演習もつる。剛文所見ふ備へたる。菊水の陣と言せし  
真假二の差別あり。と監物が傳へし。楠正成これとあり。  
足利直義の傳へしあり。正成預て直義か。反心しるを察  
觀せしむ。其正法と教へし。徒形容と授けし。果して  
直義謀叛せしむ。新田義貞ふ宜旨と賜ふ。直義と伐し  
むる時。正成義貞ふりあり。直義斯くの陣と布は。如くふ  
し破られし。教へ違ふを箱根の軍ふ。十六騎とめて彼陣  
と破て直義と追伐せし。且小石が布たる陣も楠正成の遺

法あり。菊水の陣とりむ。是は直義の傳へし。法と異なり  
て。正成一期秘し。尋常の兵學者の存する所あり。然るに  
誠み進退自由あり。百戦百勝の法あり。然るに正成の陣は  
時代のまゝ。世上ふ。鳥銃も。鎗もあれど。最短あり。然るに  
攻も又守も。今と小同大異あり。近代の武士は鳥銃と專一  
みを行はる。臍槍の二間柄あり。其心と攻も又守も。増  
減あり。陣法も。圖をたれども。實の軍の如くも。まのり  
りあり。只時ふ應へ。変ふ隨ひ。兵士の指揮と。肝要あり。言状  
しける。織田殿始め。諸老臣も感佩あり。尾張の國の大軍師は  
木下あり。賞美せし。然るに。永祿二年の春も。夏もあり  
ければ。織田家の諸士達。今川が上洛の事と。所出。數度評定の

ありこれども。清洲の諸士今の大井。藤吉郎が詞と信。防戦の  
 事あり決し。織田殿存び諸老臣諸士と召集の。今川上洛  
 既近づけり。運と天の信も時何の所も所らん。唯速ふ  
 戦ふ。這上り餘の評議小登る。軍の隊賦と定む。命らふ  
 諸士一同有無の答へとあそめ。木下藤吉郎進出  
 君の清神慮も既ふ。清合戦と決まる。上り老臣諸士の賢ふ  
 も。軍の論議あふきと。吾も應も返答あき。猶軍勢の  
 多少ゆて。試合ゆと覚え。厭せ下り小勢と怖ら。隣國  
 小加勢と乞受。諸士の援とあそめ。四方食是敵ふ。つれ  
 の國へ。是こそ及ぬ評議あれ。四方食是敵ふ。つれの國へ  
 援と請と。命も待て藤吉郎。縦今いある敵國もあれ。信

義ゆつて通互小援合こそ武門のあらひ。又他國へ援を  
 請て。これと得もとも耻あき。齊藤朝倉北畠。敵ふと謀  
 あり。唯江州の六角へ北七州の管領。尚小居小使者の義と  
 許し。近江小到。六角父子小利害と解。加勢と牽ひ。歸  
 へ。推てゆき小織田殿も。木下が言。小虚なれば半ハ  
 是と得心せられ。使者の汝が心小信せん。然ども汝が江州へ往  
 跡へ今川義元。尚攻来らべせん。厭と煩意。思ひ諸所  
 小此石と築せむ。兵士と籠置。清待あれそのうち。江州勢と  
 牽ひて。きつと歸りゆき。清心安くおれ。主君と宥ら。つ  
 まり。次小諸士達ふ。ち向ひ。賢く听せむ。小居使者小  
 誓ふ。近江の援兵と。牽ひて歸らん。然るも。各賢

近江の加勢と。さうして憑とみも一ふり。只是敵への聞へり。  
 近江の佐々木織田殿と。一軍ふりつて相待とせん。待て、敵も敵ふ  
 ようぞ。佐々木といふ名高き弓家。軍態もさぞあらんと。狐疑  
 と生まる種とあるべし。疑心へ軍の妨り。然るに自軍の一人へ  
 他軍の十人ふ當るべし。無迷の逞兵五千とめて。狐疑の軍勢五  
 万ふ對し。歐破らん律最易り。這道の軍ふりて勝て。功ありへ  
 當家の繁昌。諸士の功名天下ふ惠き。實ふ勇力一きことふして。樂  
 ちふいひつぎや。と義勇とぞとて勸めしむ。森三太衛門。坂井右近  
 池田勝三郎と致して。會一同ふ義心と固り。斯るも上の命を  
 涯に。今川勢と伐敗り。骨へ戰場ふ曝まとも。名と万代ふ耀さん  
 と。笑と含んで吞へる。織田殿大ふ悦びしむ。主従が運天ふりり。

命の義ふりて毛よりも輕し。さう大敵とて怖るべけんや。存亡と予と  
 階ふせし。と懸せしむ。柴田悔も。今詮多し此義ふ同し。然る合戦の  
 準備とせん。評議と決して退出せしむ。其後信長藤吉郎を  
 昭倚せられ。剛才要涯の砦とて。構えき地の何所ぞ。訊ふ不  
 下謹で。鳴海の山口滅てのち。周部長教これと守れど。其餘の會是  
 廢城あり。中ふ就て智多の郡へ地勢南へ張部て。要涯の地も又  
 多し。彼邊ふ勝て五六箇所。堅固ふ砦と結搦せしむ。二百五百の  
 兵士と擇安。這所彼所より攻出るべ。今川勢の軍威と挫く。け  
 圖とめて察しむ。と襟底より馬鬃と把出。砦の地格と指し  
 けれ。信長大ふ感悦あり。然る砦と構えとて地勢と仔細見む  
 鳴海城の東南ふ。境川の入海あり。又西南の地と又あり。天白川

扇川あり境川ハ三尾の境ニ在リ扇川ハ天白川ニ一川兩名ナリト鳴海ト云潮の進退城下に通ず。東ハ谷洞漫谷洞ハ扇川ノ東ニ在リと連り。北より東ハ山嶺小し。西ハ深田と設設ハ城ノ防ヲ固メられ。誠ハ無双の地勢あり。城より北七町隔て西丹下小砦と構へ。其東ハ善祥寺。それより南ハ中嶋村。或ハ大川の間に執断。左右ニテ所小構。此ハ東ハ丸根西ハ鷲津。彼此合せて七ヶ所あり。僉丈ハ小普請成就。然レテ守將と籠も。まづ鷲津丸根の兩城ハ。敵の正魁の蒐り口也。第一肝要の切處也。鷲津小飯尾邊江守定景故備中守の同隕岐守信宗。織田玄蕃允信武織田彈正信武。と大将として。六百餘人と此小擬守らせ。丸根の城ハ佐之間大學盛重と將。同五百の兵と構へ。中嶋の東一の砦也。水野帶刀山口海老之丞三百餘人とこれと守らせ。備又西の砦也。梶川五九衛門正徳備前守の門正徳。

後尾州大山の城を斬 佐之間左京信直右先門尉信直。小三百餘人と添うけり。又善祥寺の砦也。真木兵十郎伴十左衛門。二百餘人と副従也。今川達一と待り。丹下左右の砦也。其期小追ひて主將と定む。まづ少の兵士ととも。指揮の如く小これと守らせ。斯レハ要涯堅固なり。とて。木下藤吉郎秀吉ハ六角加勢の使者とんと。信長ハ睦を請主従。まづ五六人まで。姿とて清洲と起出。近江路さへ急がれける。

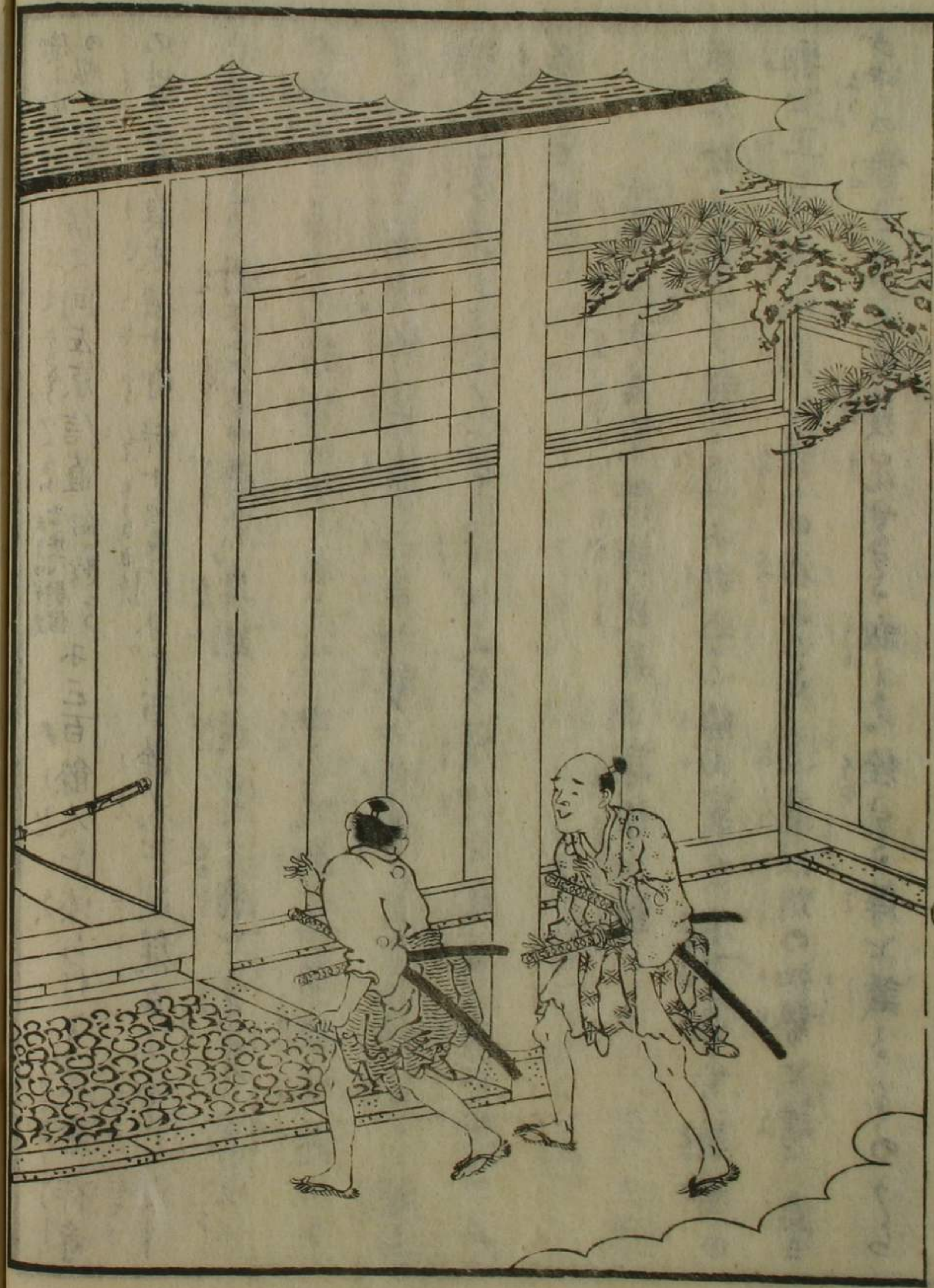
木下使六角家借得武器 附謀作加勢

砦と砦不整。鎧と勇小細あり。織田家ハ木下より。敵國の邪と正。教正。宛も種々の巻ふ。這遭江州の加勢と請。難まが中の難き事。みて發足せ。敵より。徐々。俸と議る。このうら



木下 秀吉  
 江州 使  
 途中  
 蜂須賀 正勝 訪ふ

豊臣 記 四 冊 卷 之 八



豊臣 記 神 祿 卷 之 八

十 八

預て心小謀り定り事はうとて。まづ海東郡峰須賀村小到り小六  
 正勝不音信う。正勝木下と見らるるも。屢々倒しとて出迎直小  
 室小請ト容。切小舊日の情との。あつと木下言まやう。足下と預  
 ての契約を。立身あらん方と憑むと。舊き詞のうとふれんト言  
 べき一事あり。諾受しむるこゝろなき幸あり。許さるべきやと問と正勝  
 こゝ革まりぬる課うま。いまは足下小我子の婢を。憑入べき交  
 ろると。縦今いふ事やあれ。諾さるべき道やある。心隔なく  
 語られしとふ小木下返て安途。然バ語らん別事ふらむ。這連  
 今川上洛わつき。近江の佐木へ加勢と請う。されども承禎信義  
 あければ。援兵勿く思ひもたらん。然まれば佐木の武器のといふ  
 事もあへて借承来らん。是小荷擔しむんやといふ小六微笑す。

斯ハあつる事小とそ。厥條あら此方より。晞もあき幸甚ぞや。我  
 館の壯士と集めらる。千五百人もあつる。足下佐木の使者と遂歸  
 らるる生を。あ集會せん小所ハ江州越智川より小必歸りと待受  
 りとせん心易ぞ思われと。諾受の詞小秀士も。涯々々々打喜び然ハ  
 這ま別はゆせん必とも中と詞をつぐひ。袖と別ちて急ぐやと早  
 も伊勢路へ坂過三日路と経て近江ある。蒲生郡觀音寺山の  
 城小着。尾張の織田より遙くと。泰向せし由と奏者小就て承禎  
 入道小言容う。茲小宇多源氏の嫡流六角左京大夫義賢入道  
 按開齋承禎ハ。江南の地小冠う。佐木の四郎左衛門尉泰綱京都  
 承禎ハ隱居して。家督ハ右衛門督義禰小讓る。然もいふと十五  
 歳の幼主あれば。入道万事とらと考う。時小尾州織田家の

使者木下藤吉郎来り。奏者これと連しければ。六角の家宰  
 吉田出雲守重賢承次り。承禎入道小斯と告り。入道顔小眉  
 と鬚め。尾張の織田上總介。文書ごふも交へし。何事  
 あれば遙けき道と。使者さうし。何事もせし呼  
 容と。出雲守命。吉田重賢木下藤吉郎と。使者の  
 席へ請り。初對面の威義おつて。出雲守めま。從來  
 織田殿と通書の條ごふあきあつて。不時の清使と不審  
 あれ。来意のうあつと訊ふ木下。いふも課せの如く唯今す。  
 音信のあせし條ごふあきと。不時の参向さるし。清不審。實ふ  
 めつもの條のみ。然し。信長の先祖新三郎中将資盛。  
 近江越前の國司とありつる時。武殿の清先祖源三郎秀義

公の近江の押領使とありせし。逃し親しく在ませし。條へ諧へ  
 も知らしめし條のみ。資盛西海に亡て後其子權太夫親真が  
 當國津田の庄と生長し。ぬね。是れ同邦の親好ひと。あつて  
 信長の危急の事ゆゑ。武殿の扶助と請んごら。使者と参らせ  
 たり。清披露ひと。預めと。出雲守承禎。承禎小斯と  
 言状も入道つり。これと。使者の口状。最賢くぞ。所え  
 たり。先對面し。縁ひと。訊ん。快呼入れと。あり。程小。出雲守  
 把て込し。藤吉郎と案内し。本丸に投来れば。石海門督義弼。技圍  
 齋承禎。座と。同し。對面を。响ふ承禎。問て。やう。尾江の道の遠  
 きと。厭ふ。願ひつ。登り。由。出雲守より傳聞せ。織田より願ひ

新義連の  
義統の  
今川氏親  
の戦ひ  
敗つて

のおもむき。いづる事や伸て見。訃は木下衣徳と慙。辨舌  
爽不吉を謂や。這遭主人信長より。願の條へ別事小に。織田  
の主人は斯波家の大敵。今川義元大軍と將ひ。上洛とく。路  
路次の國に追捕して。推行らば尾州の地へ。其通路ありぬと。  
信長迎へて合戦なり。先年引馬野の戦ふ。今川のるも敗軍  
せし。斯波義連の耻とも雪ぎ。うつら尾州の百姓は塗炭の苦  
とも救たまふ。存し起とも兵士少く不足なり。意本あくぬ。  
當清屋形一願ひせ。所籍と洋借つるなり。所籍  
とふゆい奉る。其籍の威の下風不周。國中の兵士無氣力  
と増。軍の勇と添んがら。使者と来らせり。屋形の驗  
四目結ハ。天下不藏あり。其花号とふ見せるあり。縱令

今川百万の大軍とて攻来るとも。何とく也。解ららん。願ひ清許  
諾らざれと。言演れ承禎入道。今川の軍勢のうらむ。織田  
の兵士幾許ありや。然も義元が四箇の國人へ。おも五万もけりぬ。  
然して織田の兵は五千餘ありぬ。然も近江の援兵と。  
五千二千借られぬ。勝利と得る。吾命ともあらぬ。  
さき軍の勢の多し。ふらぬと。解らぬ。解らぬ。言新も演る。  
何れぞ。大将の指揮の順阻ふ。何十万の敵もあれ。兵士心を  
一致せ。破崩まぎ。解難くらむ。然るも此般主人より。晞ひす。  
加勢の義。倘清兼諾なき。則へ唇亡びて。齒牙寒し。といふ金言。  
よく。清遠慮あらむ。怖れも。説並ら。兼禎猶も諾。  
使者の口状理ふ。我國近來江北の浅井一家と闘合。長政妻を



豊臣家御用金



武器  
借得  
圖

秀吉  
不思議智  
六角家  
使節

豊臣家御用金



平井加賀守よりめぐるうらぬと有る  
 江南六角と合戦するもあまなく  
 一々今猶最中なるものと。勿く他國へ加勢へ  
 るら下。とりよと秀吉おー吸。それい先も言ま如く。所加勢の兵士  
 と遣へさるふへ及をばひ。只千餘人の旗當標。甲冑との借させ  
 る。其あてこと足りあまし。只管願ふ小當主義。彌年より甲  
 ちんせし。了得い大領の主され。秀吉ケ智舌小感。速ふ是と話  
 むひ。土雲守小命あり。一千五百の武具へ勿論旗當標。せ借賦。  
 頻ふ木下と賞美。り。最懇切小響應せられ。藤吉郎と帰され  
 づ。秀吉大歡ひ勇。一千五百の甲冑兵。あ申き。權小執。収め。  
 之四十人の人技とやとひ。昇擔せ。あぐ小隙も。同國越智川小  
 来小け。預て峰須賀正勝小。約せ。詞のり。とめて。小六の木下  
 歸ふ。き。時日と量て準備。家小養小。壯子輩と。美濃伊勢

近江小彼。徊せ。千五百人の猛卒と。這隅彼隈小集。せ。木下  
 遅。待。藤吉郎の使節と。做果。根。人。使。小昇。荷。せ。  
 道。急。せ。来。小。正勝。あ。て。出。迎。小。秀吉。涯。を。これ。を。歡。び  
 荷。せ。来。り。一。甲冑。兵。器。と。食。某。へ。配。か。り。一。千。五。百。有。餘。人。と。  
 越智河原小隊。伍。つ。ら。せ。若。然。と。て。所。ね。と。さ。り。の。世。人。の  
 よ。く。知。る。六。角。佐。木。の。花。号。四。目。結。の。よ。せ。け。る。ね。誰。の。近。江  
 の。六。角。が。援。の。兵。と。懷。を。さ。る。べき。厥。上。這。小。集。る。壯。士。大。は。江。州。の  
 産。な。れ。實。の。六。角。勢。あ。り。も。如何。で。是。小。ま。さ。る。べき。と。藤。吉。郎  
 疾。子。笑。る。小。六。と。招。ひ。て。其。勞。を。酬。ひ。隊。伍。と。て。決。定。し。む。ね。は。  
 正。勝。も。借。小。歡。勇。と。且。驕。氣。小。謂。け。る。や。それ。六。角。の。加。勢。あ。り  
 とも。多。く。へ。輕。卒。の。品。輩。も。く。名。を。威。と。耻。と。知。る。き。武。士。の。左。右。の



東五巴刀編卷六



峰須賀の  
 壯士等  
 木下の約  
 江列越智  
 河原ふ群  
 集する圖

東五巴刀編卷六

指と屈むるゝも。凡有まゝと懐小者。今も集り壯士輩へ  
 のぐれも傑氣の暴武士ありて。無臆死の族なれば一人を  
 六角の加勢小比まね。五六人も當之。中も殊小勝と云ふ。  
 稲田大炊助。青山新七。同苗小助。河口久助。日比野六太夫。長  
 江半之丞。梶田隼人。松原内匠助。あんとりて。各名を得し  
 勇士あるが。假ふ六角家の士名を呼せん。這よりうらまやと健  
 づもて。いふ木下實小のと同。尾張とさうて急ぎけるが。這ふ  
 伊勢へ敵國あり。訴歩のそで通りあり。狼藉のそも計ど。  
 ずの北畠小道と借通行まゝと懐ひく。秀吉まゝの  
 使者とめて。員辨の郡。梅戸貝野の地頭小遣とす。是は江  
 六角家より。兵士一千餘人と牽て。尾州へ當向の所領地

通路の先ふちして。新温坊まゝく。異義多く所通ふをれく。  
 和義救々。謂容く。那地も無事小路とか。つがも。つらと  
 木下峰須賀。尾州の地を投う。然るに地下人輩。六角  
 勢の旗さめ。従来見ざる筈はけれど。江州佐木の花號。四目  
 結とりと云。種よく皆知するなれば。實ふ六角家の加勢とおひ。  
 浩る大家も織田殿の屏伏せらる。條りて。加勢と送り遣し  
 ぬる。駭くもあを訝るもあり。街巷の風説喧し。既ふ這勢路  
 次といふを。清洲近くありなれば。敵ふ六角加勢の事と。あつ  
 ると。謗も。輩も。忽木下が智辨と感。且織田殿の遠威  
 尊と。這遭の軍と。烈まきん。他家へ對して面目ありと。自己と心  
 勇勵す。妨戦ふ身と。ゆひけ。藤吉郎の清洲へ歸着し。



豊臣日記



秀吉の妙智  
江州不使と  
得る  
六角の  
加勢を  
求め  
歸る

豊臣日記

江州勢ハ區々小。假館と揮て分與一自身ハ直地小登城一々。  
 主君信長小見来る。承禎父子の動靜と詞詳小言状して。次小  
 兵器甲冑の事と。借受さう一初より。蜂須賀小六が加勢の末。さう  
 正勝が智勇の輝まで。語つて果す。君の技助さる者小こそと。  
 頼みこれと勧めす。且今山と戦ふ。老臣諸士の存懐おね。  
 主張近江の加勢とおぼされ。然る一と稟まふ。織田殿殆感玉  
 せられ。藤吉郎が詞の如く諸老臣へ指他せられ。今川義元進来  
 ら。國境まで打て発。頼小勝負と決せん。其準備とせられ。る  
 今川義元軍馬発東海道属欲攻尾州  
 永禄三年五月六日。辛未夏至の節小入れ。午火生じて。卯木死を  
 了。五行の運あり。然る小義元ハ己卯小生れ。信長ハ甲午小生る。

痛む。今川義元。今年今月軍と発し。信長とりて。敵とまふ。  
 誠小天然の死地小着あり。慎まさんばあるべからば。然れど小駿州  
 府中の大領今川治部大輔義元朝臣。年来の宿懐おね。直  
 地小上洛の事と。遂京都の將軍家と補佐一すのせ。こ好松水  
 等が狼藉と。鎮んと思ひ起あり。采地の仕法小睦あり。殊お  
 隣國の輩。留守と得たりと。境地と推乱さんとの煩勞一けね。遂  
 小斯まで延置せり。此春既小北條家と縁家小あり。武田ハ  
 素よりのお深く。駿河と窺小所謂あり。今こそ時節到来まされ。  
 先打発と徇あり。伊豆駿河遠江之河四ヶ國の軍兵催促  
 小應して海聚る。駿府の留守小嫡子氏直。其餘の一族門  
 家の將士六十餘人と。揮られ。然る小五月十日の辰の上刺府中

豊臣言夜録卷之八

三十一

の城と発軍す。一日六里餘の式歩とくせせて。四日行と経る十三日小  
 遠州濱名小着れり。這きて諸勢と待揃。其勢都合四万有餘  
 騎とや。曉まへ五月十四日海上紅旭の光と共小。濱名の郷と打起  
 へ。東海道を髪かみの如く。白須賀二川吉田驛と。軍兵片地の  
 断地あく。得く然と推登り。十五日の未と経るころ。岡崎小投着り。  
 軍の分部と決定られ。同月十七日小岡崎と打発。尾張の國智多  
 の郡小着。桶狭間の南丘なる。要害堅固の地と撰られ。十八段  
 小陣と居。十八日の蚤朝より。智多の郡の諸所と放火。明日こそ  
 兵士と烈す。鷺津九根の兩城と快攻陥して。鳴海へ推出し。  
 森地く攻ふるまいつめと烈く然るその勢ハ。千龍淵小跳らん時  
 万虎嶽と走るが如く。旌旗ハ峯も谷際も隙間もききまを翻ら  
 せりりける。

時刻く小金鼓と鳴ら。異口同声小奮発する。陰陽合呼の  
 喊の声ハ。天地山河と震らせと。あそりあんと。言語小断する相小

繪本豊臣勲功記初編卷之八終

